THE UNIVERSAL GOSPEL

不滅の言葉

日本ヴェーダーンタ協会

2016 No.6

November

知　恵　の　真　珠
Pearls of Wisdom

シュリー・シャンカラの言葉

師と弟子

ヴェーダーンタの説く意味を熟考することにより、有用な知識が得られる。その結果、相対的世界から生じる苦悩は直ちに完全に壊滅する。

信仰、献身、瞑想のヨーガ、これらは求道者の場合には解脱への直接的な条件だと、ヴェーダは述べている。これらを忠実に守る者は、自己と身体との同一視という、無知が生じさせた束縛から解き放たれるのだ。

至高の自己であるおまえが、自分を非自己の束縛の下にあると見なすのは、まことに、無知に影響されたからに他ならない。幾多の誕生と死の輪廻も、この無知からのみ生まれている。

真の自己と、無知から生まれた架空の自己とを見極めることで、点火された知識の炎は無知がもたらす影響や、その根源までも焼き尽くす」

Thus Spake Sri Sankara

The Teacher and The Disciple

Reasoning on the meaning of the Vedanta leads to efficient knowledge, which is immediately followed by the total annihilation of the misery born of relative existence.

Faith, devotion and the yoga of meditation — these are mentioned by the Vedas as the immediate factors of liberation in the case of a seeker; whoever abides by these, gets liberation from the bondage of the body, which is the conjuring of ignorance.

It is verily through the influence of ignorance that thou who art the Supreme Self, findest thyself under the bondage of the non-self, whence alone proceeds the round of births and deaths.

The fire of knowledge, kindled by the discrimination between these two, burns up the effects of ignorance together with their root.'

不滅の言葉 The Universal Gospel

真理はひとつ、聖者たちはそれをさまざまの名で呼ぶ。――リグ・ヴェーダ

2016 年 11 月　第 57 巻 第 6 号　November, 2016　Vol.57 No.6

Website: vedanta.jp

CONTENTS

私たちが見たラーマクリシュナ（65）―― スワーミー・チェタナーナンダ　04
Ramakrishna As We Saw Him (65) …… Swami Chetanananda

神と共に（56）―ラーマクリシュナ家住信者の物語 ―スワーミー・チェタナーナンダ　08
They Lived with God (56) ― Life stories of some devotees of Sri Ramakrishna
…… Swami Chetanananda

マハーバーラタからのお話（39）―― スワーミー・シヴァーナンダ　12
Stories from The Mahabharata (39) …… Swami Shivananda

平和と幸福へのヴェーダーンタの道（49）―― スワーミー・アディシュワラーナンダ　14
The Vedanta Way to Peace and Happiness (49) …… Swami Adiswarananda

宗教的生活における探求（55）―― スワーミー・ヤティシュワラーナンダ　19
Adventures in Religious Life (55) …… Swami Yatishwarananda

インドにおける僧院生活（45）―― スワーミー・バースカラーナンダ　23
Life in Indian Monasteries (45) …… Swami Bhaskarananda

ヴィヴェーカーナンダ自身を語る（15）―― スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ　25
Swami Vivekananda on Himself (15) …… Swami Vivekananda

ヴィヴェーカーナンダとの対話（32）―― シャラト・チャンドラ・チャクラバルティ　30
Talks with Swami Vivekananda (32) ……Saratchandra Chakravorti

「ヒンドゥ教入門」より（22）　33
Frequently Asked Questions (22): A Primer of Hinduism

編集長の話：霊的な生活の課題 (2)　36
Editorial: Challenges to Spiritual Life (2)

忘れられない物語 ――「まず、ゴルフボール」　40
The Story Unforgettable "Golf balls first"

協会ニュース　42
News of the Society

写真　46
Photograph

凡例　※ 注のアラビア数字は原注。例［1］［30］、注の漢数字は訳注。例［一］［三〇］。原注・訳注は章、または本文の最後にまとめてあります。
※（　）の文字は、基本的にその前にくる言葉の簡潔な訳注です。例 プラーナ（神話）

ヴェーダーンタは、思索、信仰、心の統御、あるいは結果に執着しない無私の働きによって――多くの場合、それらの２つ以上または全部を併せ行うことによって――自己の神性を開発することを教える。
さまざまの宗教は、傾向を異にする人々が同一の目的に向かって進むために設けられたさまざまの道である。ヴェーダーンタはこのことを認め、人類にこれらの道を示した古今東西の偉大な聖者たちを等しく敬う。

カバー写真：The Himalayan range、ヒマラヤの山並

私たちが見たラーマクリシュナ（65）

スワーミー・チェタナーナンダ著
スワーミー・シヴァーナンダ（3）

シュリー・ラーマクリシュナとの最初の出会い（続き）

「当時私は全身焼け焦げるような感覚で耐えられなかった。私はお前の父親に会ったとき、『さて、あなたは母の信者であり、私もそうである。私も少しばかり瞑想をする。だが、どうして私は全身焼け焦げるような感覚を覚えるのか、訳を教えてもらえないだろうか？　ほら、焼け焦げるような感覚があまりにも強すぎて、体中の毛が焼け焦げている。これはときどき耐えがたいのですよ！』お前の父親は、私が選んだ神様の名前を刻んだお守りを身につけるとよい、と私にすすめた。不思議なことに、そのお守りを身につけると、焼け焦げるような感覚はたちどころにおさまった。お前、父親にいつか私を訪ねるよう、頼んでくれないか？」

当時、私はカルカッタに住んでいて、たまにしか家に帰らなかった。シュリー・ラーマクリシュナのことを話したとき、私の父はとても喜んで、ある日師を訪ねて来た。別の機会に師は、「お前の父親の霊的修業は、世俗的な目的に対する願望

が伴っていた。霊的修業の結果、多くの富を蓄え、立派に使った」とおっしゃった。

師のもとを訪れはじめた最初のころ、私はしばしば泣きたい気持ちになった。ある晩、私はバクルの木の近くの川べりでこらえきれずに泣き出した。師は部屋におられ、私がどこに行ったのかを尋ねられた。私が戻ったとき、師は私に座るようにと言って、「主は人が彼を求めて泣くとき、大そう喜ばれる。愛の涙は長い年月を経て積みあがった心の不純さを洗い流す。神に泣きつくのはとてもよいことなのだ」とおっしゃった。

別の日、私がパンチャヴァティの茂みの中で瞑想（めいそう）していたとき、私の集中力はとても深くなった。師が松の茂みのところから私のいる方に近づいてこられた。そして、私を見つめられるや否や、私は泣き出してしまった。師はじっと立っておられた。私は胸に何かが内側から這い上がってくるのを感じ、発作的に身震いした。師は、私が泣いたことは決して些細なことではない、それは一種の法悦なのである、とおっしゃった。私はそれから師に従い師の部屋に行き、何か食べ物を授けられた。師にとっては、クンダリニー［1］の覚醒（かくせい）はたやすいことであった。師は指一本触れることなく、ただ見つめるだけでそれを行うことができた。

［1］クンダリニーの文字通りの意味は、「とぐろを巻いているもの」。背骨の基底に霊的エネルギーが眠っているのである。ヨーガの修業を通じてクンダリニーが目覚めると、スシュムナーを通って上昇する。そして、それぞれのチャクラ、すなわち意識の中枢を通るとき、様々な霊的体験を経験する。

ドッキネッショルでの日々

ドッキネッショルは私たちの地上の天国だった。それは私たちのカイラース山（シヴァ神の聖なる住まい）であり、ヴァイクンタ（ヴィシュヌ派の天国の呼び名）であった。それがありふれた場所でありえようか？　シュリー・ラーマクリシュナはそこで約三〇年間暮らされた。パンチャヴァティは師が非常に高度な霊的体験を、数えきれない位経験された、偉大な霊的完成の場であった。一二年間、師はドッキネッショルで異なる様相の神との交流を実践された。そこで得られた神のヴィジョンと霊的実現は、比肩（ひけん）するものがなかった。宗教

の歴史において、これほど強烈で多様な霊的修業が行われ、これほど高次の霊的体験がされたことは、他の神の化身の人生ではみられなかった。師はいつも「ここ（彼の中で、という意味）で起こっている体験は、これまでの記録を超越している」とおっしゃった。それだから、スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）はいつも師のことを、「最も偉大な神の化身」と言い表したのである。

師はヴリンダーヴァンからすこし塵を持ち帰り、パンチャヴァティに振りまかれた。ドッキネッショルのどんな塵も神聖である。神ご自身の聖なるみ足が触れることによって聖別され、ドッキネッショルは偉大な巡礼地になったのである。あらゆる宗派の人にとり、非二元論者にとっても二元論者にとっても、シャクタ（シャクティ［ブラフマンの創造力］信仰者）にとってもヴァイシュナヴァ（ヴィシュヌ神信仰者）にとっても、シャイヴァ（シヴァ神信仰者）にとってもタントリカ（タントラの教義の信奉者）にとっても、この地は霊的感動の源泉となってきた。というのは、師はこれらすべての神との霊交を修業され、それを成就されたからだ。今回、神は偉大なサットワ（純質）の性質をもって顕現された。それは根本の力、宇宙の偉大な神、あらゆる創造の源泉であり、師の体を通して、思う存分に、また喜びながら、それ自身をその通り表現されたのだ。師の強烈な霊的サーダナ（修業）は、この地上だけではなく、より高次の領域に、天上までも影響が及ぶだろう。ああ、なんという神の力のお遊びだったのだろうか！

（師に出会う前）私はよくブラーフモー・サマージに行っていた。私がドッキネッショルで師にお会いしたとき、師は私に「お前はシャクティ（宇宙の力）を信じるかね？」とお尋ねになった。私は、「いいえ、師よ、私は神の無形の相の方を好みます。それでも私はある種の力が万物に浸透していることを感じます」と答えた。それから師はカーリー寺院に行かれ、私もついて行った。寺院の方に進むに連れ、師は神聖なムードに捉えられ、寺院に着いたとき、師は母の前で深い信仰心を込めてひれ伏された。私は困難な立場に立たされた。私はカーリーの神像の前で礼拝することをためらった。それでも私は、つまるところブラフマン（絶対者、ヴェーダーンタ哲学の最高の実在）はあらゆるところに浸透している、それゆえそれは、この像の姿にもなりうるに違いない、だからその前にひれ伏すのをためらうべきではない、と思った。この考

えが起こるや否や、私も母のみ前にひれ伏した。

後に私が師をもっと頻繁に訪れるようになると、姿を持つ神に対する信仰は強まった。師とこのような関わりを持つことができ、師の恩寵を受けることができたことは、私にとっては幸運だった。

（シュリー・ラーマクリシュナとシュリー・サーラダー・デーヴィーとの関係に関する信者からの質問に対し）ホーリー・マザーがドッキネッショルのシュリー・ラーマクリシュナのもとにやってきたとき、師は彼女を追い払われなかった。反対に、師は彼女を身近に置いて霊的な事柄について助言をし、あらゆる点で彼女を励まし助けられた。しかし師がそうされたのは、ニルヴィカルパ・サマーディを達成された後だった。「そこの寺院におられますみ母は、ここ（彼自身の体のことを指す）の中におられますみ母と同じである。また、私の中におられますみ母は、ホーリー・マザーの姿をとられているみ母と同じである」と師はおっしゃった。私たちは、なぜ師が師のやり方で振る舞われたかを理解したいと願ったり、試みたりすることは決してない。もしあなたが師のやりかたを理解できると思うのであれば、それは結構である。師はあのようなやり方で振る舞われた。私が知っているのは、ただそれだけだ。

師の手はとても柔らかかった。けれども、なぜ手のことだけを話すのだ？　師は体中がそうだった。たとえば、あるとき師はルチ（揚げパン）の堅い殻で指をお切りになった。

夜には師はおそらく一切れか、せいぜい二切れのルチと、おかゆをお食べになった。師は牛乳をそのままでは消化できなかったので、師のお食事を用意する人は、水を加えて小麦のクリームと一緒にプディングを作った。師はそれを少しだけお召し上がりになった。食器棚には新鮮なチーズを使ったお菓子が置かれていた。師はお腹が空くといつでも、一切れか二切れ、ことによったら半切れ食べ、残りはそこにいる他の人たちに分け与えられた。師の振る舞いは、いつも子供のようであった。それは、あたかも師ご自身が子供であるかのようだった。

（荒木　光二郎訳）